

「おなかに優しい」A2牛乳普及へ オーケーやライフ販売－乳牛の登録制度も開始

2023/09/28 05:00 日本経済新聞電子版 2308文字

おなかが痛くなりやすいとされている希少な「A2牛乳」の流通が広がり始めた。オーケーやライフコーポレーションが販売し、業界団体は8月に乳牛の独自の登録制度を導入した。A2牛乳はオーストラリアや中国などで需要が増え、世界市場は2028年に4兆円規模になる見通しだ。日本でも牛乳の消費を支え、輸出品につながる可能性がある。

ディスカウントスーパー大手、オーケーの藤沢店（神奈川県藤沢市）。牛乳売り場でこのほど、ぱっと目を引く緑色のパッケージの牛乳がずらりと並んだ。日本一の生産量を誇る北海道別海町の生乳を使い、デザインでは「A2」の大きな文字が際立つ。日本ではまだ流通が少ないA2牛乳の商品だ。

購入した50代の女性は「A2はおなかがゴロゴロしにくく、A2でなければ牛乳は飲めないと思っていた。宅配で購入してきたが、店舗で手に入りやすくなってうれしい」と喜ぶ。

大手ディスカウントが全店で
オーケーは今年4月に一部店舗から、「近藤乳業北海道A2別海牛乳1000ミリリットル」を扱い始めた。売れ行きが好調で、販売を8月末時点で144の全店に広げた。

9月下旬時点の価格は251円（税込み）。一般的な牛乳より1割前後高いが、牧場などで販売されているA2牛乳の各商品と比べると、おおよそ半分から4分の1程度だ。製造する近藤乳業（神奈川県藤沢市）は「まず市場の裾野を広げるため、付加価値を打ち出しながらも値ごろ感を追求した」という。原乳は北海道別海町から2日に1度の頻度で仕入れ、100店規模に安定して供給できる体制を整えた。

腹痛などが起きづらい「A2型」

牛乳にはたんぱく質の「ベータカゼイン」が含まれ、「A1型」と「A2型」の2種類がある。乳製品の摂取で下痢や腹痛などを起こす「乳糖不耐症」の症状が、A2牛乳では軽減したとする海外の論文がある。

業界団体の日本A2ミルク協会（北海道富良野市）によると、人間の母乳はA2型のベータカゼインで、羊、ヤギ、ラクダなどの乳もA2型という。一方で、日本で流通する商品の多くはA1型が混ざった牛乳だ。

日本A2ミルク協会の代表で、酪農家の藤井雄一郎氏は「体への負担が少ない効果などが期待され、牛乳を控えている人でも飲みやすい可能性がある。消費の裾野拡大が期待できる」とする。



オーケーは希少な「A2牛乳」の販売を全店で始めた

A2牛乳を扱う主な事業者	
ディスカウントスーパー大手のオーケー	近藤乳業（神奈川県藤沢市）の牛乳を全店で販売
ライフコーポレーション	4月以降、オーガニック系の運営店舗を中心にA2の乳製品を販売
カネカ	A2牛乳を使ったヨーグルトの製造に参入。10月から品ぞろえを増やす
中谷牧場（北海道佐呂間町）	A2の牛乳やヨーグルトを販売
中標津町農業協同組合（北海道中標津町）	なかしべつ牛乳プレミアムNA2MILKを販売

市場拡大を見込み、小売り大手の取り扱いやメーカーの参入が相次ぐ。

食品スーパー大手のライフコーポレーションは4月以降、主に有機や自然食品を扱う店舗「BIO—RAL（ビオラル）」を中心にして、A2牛乳を使ったカネカの有機ヨーグルトの販売を広げている。「A2牛乳の良さを店頭で訴求して、販売拡大につなげたい」（ライフ）とする。

製造に参入したカネカ、輸出も視野

カネカは今年3月に子会社を通じ、A2牛乳を使ったヨーグルトの製造を始めて市場に参入した。2020年、北海道の生産者の別海ミルクワールド（別海町）と共同で、農薬や化学肥料などの化学物質を使わない有機乳製品の製造・販売会社、別海ウェルネスファーム（同）を設立。22年末までにA2専用の乳牛約120頭をそろえ、商品化にこぎつけた。

内容量330グラム（494円）の商品のみだったが、10月からラインアップを増やす。100グラムの個食タイプ（267円）で、プレーンとブルーベリー味の2種類を発売する。カネカは「国内ではまだA2の乳製品の品ぞろえや売り場が少ないことが課題だ。気軽に購入しやすい少量タイプを拡充した」と説明し、潜在的なニーズを開拓する。将来的に海外への輸出も目指している。

普及への研究や環境整備も進む。東京農業大学の庫本高志教授は重井医学研究所（岡山市）と共同で、生乳からA2を見分ける技術を開発した。これまで、A2牛乳の特定方法は乳牛の毛根の遺伝子を抽出する方法しかなく、生乳での検査方法は世界初とみられる。

庫本教授は「（手間のかかる）遺伝子抽出の必要がなくなり、A2牛乳の品質検査がより手軽にできる。生産者の負担軽減になる」とみる。海外では市場が先行して拡大しており、「日本で効率的な生産体制が整えば、輸出産業としての可能性が広がる」と指摘する。

日本A2ミルク協会は8月、A2の遺伝子を持つ牛の個体番号の登録制度を始めた。A2遺伝子を持つ乳牛の検査証明などから、協会が認証するシステムだ。藤井代表は「認証体制の確立で、消費者に安心してA2牛乳を届けられる」と述べ、全国の酪農家に登録を促していく。

28年の世界市場、2.6倍の4兆円規模に

海外では先行し、A2牛乳の市場は伸びている。調査会社のグローバルインフォメーションによると、世界の市場規模は2028年に292億ドル（約4兆3500億円）と、22年比で2.6倍に急拡大する見通しだ。粉ミルクなどにも転用が広がる。

ニュージーランド（NZ）で創業し、オーストラリアで上場するa2ミルクカンパニーの23年6月期の純利益は1億4484万NZドル（約130億円）で、前の期比26.2%増と大幅に伸びた。A2牛乳の専業メーカーだ。粉ミルクを含めて中国や豪州、米国などでの販売に力を入れる。

スイスのネスレのほか、NZの乳業最大手のフォンテラも18年にA2牛乳の市場に参入した。

一方、日本では長らく「指定団体」と呼ばれる各地の酪農団体と乳業会社が乳価を交渉し、一元的に酪農家から生乳を集荷するのが一般的だった。そのため、A2牛乳の独自の流通体制が難しかった。だがアレルギーの増加や健康志向の高まりで成長領域になる。酪農家や乳業メーカー、小売りが連携し、付加価値の高い商品を国内外に供給しやすい仕組みの構築が課題となる。（京塚環）

【関連記事】牛乳生産、23年度3.4%減見通し 値上げで消費鈍化

許諾番号30095557 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.